

33 カ国リレー通信

<第7回> ベネズエラ

カラカス：チャベス革命と（反）グローバル都市の現在

林 和 宏

人、物、サービスの国境を越えた移動に体現されるグローバル化は、多くの予想に反し、単なる国民国家の終焉に帰結しない。アメリカ的生活様式の世界的拡張と同時に、人口に膚浅して久しい「グローカリゼーション」という新たな（拒絶）反応を世界各地に引き起こしている。そこでは、「左派的」なものであるか「保守的」なものであるかは措くとして、新たなナショナリズムが台頭している。今世紀初頭よりアカデミックな領域のみならず、外交やビジネスという局面においても声高に主張されるようになつたいわゆるラテンアメリカの左傾化は、米国主導のネオリベラリズムにより疲弊したラ米国民からの愛国主義的な異議申し立てと捉えることが出来る。

70年代までラ米諸国の中で最も米国の生活様式が浸透したと言われていたのは、ベネズエラ、とりわけ首都のカラカスであった。域内随一の産油国であるベネズエラは、当時、石油価格の高騰もあり、未曾有の経済ブームに沸いていた。そこには、分厚い中産階級が形成され、週末はこぞってマイアミにショッピングに出かけるような繁栄があった。しかし、80年代に入って石油価格が下落すると、国民に分配する「パイ」が縮小し、更には、この分配機能を一手に引き受けた国家の汚職や非効率が露呈した。1989年には、時のペレス政権によるネオリベラリズ



熱烈なチャビスタとして知られる パレト首都区長官（左）の発言に耳を傾けるハート（中）とネグリ（右）
(筆者撮影)

ム政策が国民の反発を受け、「カラカス大暴動」が勃発すると、ベネズエラに存在するとされてきた階級間のハーモニーが瓦解し、各社会セクター間の対立が先鋭化していくのである。

こうした国民の不満を滋養に、真なる国民参加型の民主主義とネオリベラリズム批判を旨とするボリーバル革命を主張し台頭したのがウゴ・チャベス現大統領（1999～）である。チャベス大統領は、就任直後に制憲議会を召集し新憲法を制定し、「オリガルキー（寡頭支配層）」の利益のみを代弁する代表制民主主義に替えて参加型民主主義を導入した。更に、前政権より引き継いだマクロ経済の不安定や2001年末より開始される反政府との政治闘争を切り抜けたチャベス政権は、2003年より社会ミッションと呼ばれる貧困者救済

プログラムを開始する。前政権の各種社会政策より排除されてきた「バリオ」と呼ばれる貧困者居住区を中心に無償医療サービス、識字教育、初頭教育、職業訓練、補助金による安価食糧供給小売店網の設置等を提供していく。

2004年8月に実施された大統領罷免国民投票でチャベス大統領の罷免が否決されると、2004年10月の地方選挙、翌2005年12月国会議員選挙、そして2006年12月の大統領選挙とチャベス政権は立て続けに勝利を重ねていく。政治的安定と石油価格の高騰に支えられ、首都カラカスでは、こうした社会プログラムやその他政府による各種イベントが豊富に「展示」され、それを一目見ようとする国外からも「革命ツアーやが組まれるようになる。いつの日かかつてのハバナやマナグアのような左派のユートピアと参照されるようになるカラカスには、左派的知識人・学生のみならず、欧米の著名芸能人や一般観光者が訪れるようになる。グラフィティと呼ばれる街頭の「壁画」には、チャベス大統領礼賛やら米諸国との団結とともに、反帝国主義のメッセージが溢れ、チャベス大統領をイメージした「キャラクター・グッズ」が後に「アルバ・ホテル」と改称されるヒルトン・ホテル内の土産物売り場にまで展示されるようになる。

左派のユートピア・カラカスを更に強く印象付けるのは、7万人もの参加者が訪れたとされる2006年1月末開催の世界社会フォーラムである。ブラジルのポルトアレグレをルーツとして、今や左派社会運動や知識人の祭典として世界的な展開を見せる同フォーラム開催期間中、首都中心部の官庁街をメイン会場にカラカス全域で、討論会、講演会、演劇や各種パフォーマンスが開催されるとともに、多くの露天が出てにぎわった。もちろん、政府や政党からの自律を掲げる社会運動や知識人が、潤沢な石油収入に依拠したチャベス



チャベス大統領やチェ・ゲバラをイメージした土産物
(筆者撮影)

政権の資金援助によってフォーラムが特定の政治色に染まることを憂慮する一面もあったが、同大統領の掲げる（当選直後の）モラレス・ボリビア大統領への連帯表明、「帝国子飼いの犬」であるウリベ大統領批判、あるいは「アルバ（米州ボリーバル代替構想）」、「ボリーバル革命」といった口当たりの良いキヤッチフレーズが、参加者の団結や連帯感を鼓舞するに十分なものであったことは言うまでもない。

フォーラム直後にカラカスを訪れた『帝国』の著者であるトニ・ネグリとマイケル・ハートは、首都区長官のファン・バレトとベネズエラの最高学府であるベネズエラ中央大学で講演会を開催した。ヨーロッパ出自のネグリは、チャベス政権が多用する「人民(pueblo)」の用語がファシズムと政敵の排除を喚起するものであると述べ、多中心的な集合体である「マルチチュード」の可能性を模索するべきであると主張した。しかしこれに嗜みついたのは他でもない赤いシャツに身を包んだ草の根のチャベス支持者であった。各種社会ミッションや政府奨学金による高等教育の機会を得た彼(女)らは、「チャビスタ(chavista: チャベス支持者)」の共同的アイデンティティの拠り所となる「人民」概念を見

知らぬ知識人が勝手に脱構築することを批判するとともに、「肘掛け椅子の知識人」が、ベネズエラに根付く社会問題を考慮することなく、リアリティの乏しい「マルチチュード」なる共同性を提案することに対する怒りを表明したのである。

両者の議論を敷衍することは本稿の主旨とは外れるので別の機会に譲ることとする。しかし、マイケティア国際空港に降り立った旅行者は、首都カラカスまでの道すがら、こうしたチャビスタの批判を裏支えするに十分足る、ベネズエラにおける貧富の格差を目の当たりとする。と同時に、帝国に抗うナショナリズムが見つけ出した「他者」は、未だに首都区東部を中心に、鉄条網と武装警備員に囲まれた瀟洒なマンションで、バリオのそれとはまるで異なった生活を送っている。その両者間に存在する政治対立は熾烈を極め、排除

と敵対関係がカラカスの街を明確な形で分断している。

都市の過剰を批判し、農への回帰を説くチャベス大統領。それでも関わらず、政権の社会政策が集中する首都に向かう人の波は止まらない。社会主義的モラルに依拠したストイシズムと自己実現を支持者に要求するチャベス政権であるが、高騰する石油価格に伴う政権内部での汚職の報道も絶えない。果たしてチャベス大統領の夢見るオルタナティブなグローバル化である「もうひとつの世界」は可能なのか、あるいは多くの反政府側評論家が言うように、チャベスのカリスマとオイル・マニーが尽きたカラカスに屹立するのは、貧困が憎悪と対立を生むディストピアなのか。

(はやし・かずひろ 在ベネズエラ日本大使館専門調査員)

[ラテンアメリカ参考図書案内] ■■■■■

『超積乱雲』

醍醐 麻沙夫 無明舎出版 2008年3月
567頁 2,800円+税

ブラジルに在住する作家による、アマゾン河流域に入植した昭和初期に始まる日本人移民の喜怒哀楽を壮大なスケールで描いた大河小説。

11歳で両親、弟ともにマウエスに入植した池田登与子を軸に、当初の開拓の苦闘、木島武司との結婚の約束する。ベレンへの移転後野菜の栽培、販売で生活が軌道に乗り始めたところで、第二次世界大戦が勃発。ブラジルと日本は国交断絶し、日本人移民は苦難の生活を強いられる。トメアスにジュート、ピメンタ（胡椒）栽培の適地を求めて移動し、登与子の才覚によってピメンタで成功する。そして終戦、サンパウロ州に旅行中だった武司は、勝ち組による敗戦認識者へのテロ抗争に巻き込まれて監獄入りを余儀なくされる。遙々トメアスから面会に来た登与子と武司は結婚したものの、武司は旅を続け自分を見極めたとボリビア、ペルーへ向かうが、リマでの勝ち組騒動の後、あらためて登与子への思いを自覚しアマゾンに戻って再会するまでの波乱の家族史を描いたものである。

アマゾン移民や勝ち組・負け組抗争のいきさつなど、現地に長くいる著者ならではの細部にわたる記述は、まさにひとつの移民史である。

〔桜井 敏浩〕